## 新感覚派とコンミニズム文学

横光利一

も認めるであろう。

コンミニズム文学の主張によれば、 文壇の総てのものは、 マルキストにならねばならぬ、

と云うのである。

動と、コンミニストをして、彼らの闘争と呼ばるべき闘争心を、より多く喚起せしめんが 彼らの文学的活動は、ブルジョア意識の総ての者を、マルキストたらしめんがための活

ための活動とである。

私は此の文学的活動の善悪に関して云う前に、次の一事実を先ず指摘する。

かなるものと雖も、 わが国の現実は、資本主義であると云う事実を認めねばなら

ぬ。 と。

と云う社会を、敵にこそすれ、敵としたるがごとくしかく有力な社会機構だと云うことを 此の一大事実を認めた以上は、われわれはいかに優れたコンミニストと雖も、 資本主義

れわれ文学に関心するものの問題ではな かしながら、 此の資本主義機構は、 崩壊しつつあるや否や、と云うことは、 最早やわ

現実的事実として眺むべきか、と云う二つの問題である。 のものであるか、 われわれの問題は、 或いは文学と云うものが、 文学と云うものが、 此の資本主義を壊滅さすべき武器となるべき筈はず 資本主義とマルキシズムとの対立を、

に、 更に此の問題は、 わ れ わ れ共通の新らしい問題が生じて来るべき筈であろう。 われわれの問題とするよりも、広く文学としての問題であると見る所

われわれ の討論は、 今や一斉にここに向けられなければならぬ。

達すれば、コンミニストたらざるを得なくなる。」と。 コンミニストは次のように云う。 「もしも一個の人間が、 現下に於て、 最も深き認識に

此の存在とは何であろうか。

かしながら、文学に対して、 最も深き認識に達したものは、 コンミニストたらざるを

得なくなるであろうか。

ちがいない。 なるとすれば、コンミニストの中で、文学に関心しているものは、最も認識貧弱な人物に もしも、文学に対して、最も深き認識に達したものが、コンミニストたらざるを得なく 何故なら、文学などと云うものは、コンミニストにとっては、 左様に深き認

識者の重要物ではないからだ。

トたらざるを得なくなると云う認識も否定すべきであろう。 もし、彼らにして文学を認めるとすれば、文学に対して最も深き認識者は、 コンミニス

れば、この「場合」こそ、 かくして、文学に対して最も認識深き者と雖も、コンミニストたらざる場合があるとす われわれ共通の問題となるべき素質を持った存在にちがいない。

つの対立

歴史の重大な歴史的事実であるからだ。

ズムを、 邪 に わ か れ か わ れは、 その わらず、 Ē ζ, 邪 かなる者と雖 に 認めなければならぬ。 かかわらず、 ŧ 存在する以上は認めなければならぬ。 資本主義の機構の上にある以上、 またわ れ われ は、 1 かなるものと雖も、 資本主義を、 何故なら、 マ そ 此 ル あ正 キシ

志さえも動かす必要なくして、 二つある。 かしながら、 一つは科学で、 此の二つの敵対した客体の運動に対して、 一つは文学だ。 存在理由を主張し得られる素質を持つものが、 いずれに組するべきかその意 此 の社会に

度を、 としたならば、彼らの総 帥 そうすい もしもコンミニストが、此の文学の、恰も科学の持つがごとき冷然たる素質を排撃する。 その活用なし得た科学的部分に於て排撃されねばならぬであろう。 の曾て活用したる唯物論と雖も、 その活用させたる科学的態

その科学のごとき有力なる特質を紛失する。しかしながら、 総ての文学がコンミニズムになりたる場合を考えよ。最早やそのときに於ては、 もしもコンミニストが、文学

を認めたとしたならば、 文学の有つ此の科学のごとき冷静な特質をも認めねばならぬであ

ば、 もしもコンミニストが、此の文学の持つ科学のごとき特質を認めねばならぬとしたなら 彼らにして左様に認めねばならぬ理由のもとに於てさえ、 なお且つ文学は生き生きと

存在理由を発揮する。

いか。 ける われわれ 文学がしかく科学のごとき素質を持ち、かくのごとく生き生きと存在理由を持つ以上、 いかなる分野が、 これがわれわれの新しい問題となるべきであろう。 は再び現下に於ける文学について、考えねばならぬ。しかも、 素質が、属性が、総ゆる文学の方向から共通に考察されねばならな それは、 文学に於

見る。 ものからさえも、 われ 此の恐るべき文学の包括力が、マルクスをさえも一個の単なる素材となすのみなら われには、そんな暇はない。」と云うものは云うであろう。しかし、文学はそんな 彼らもまたかかる科学的な一個の物体として、文学的素材となり得ると

それは、 ず、 ならば、 宇宙 「文字の表現」の一語で良い。 文学が絶対に文字を使用しなければならぬと云う、 わ あ 廻がいてん n わ れ さえも、 の文学に対する共通 及び他の一切 これは、 (の 問 の摂理にまで交渉し得る能力を持 題 は、 Ņ かなるものと雖も認めるであろう。 体、 (,) かなる 此の犯すべからざる宿命に 所に ある のであろうか。 っているとする ょ

問題は 唯物論: ことがあるべき筈だ。それは、 かしながら、その次に何物よりも、 分裂する。 的 に見るべきかと云う二つの見方にちがい われ われ 人間 われわれの最もより多く共通 が世界を見る場合、 な V ) 此処でわれ 唯 わ 心 れの完全に共通した 論的に見るべきか した問題となるべき

ない。 する二つ わ れわ か の社会機構を認めたと云うことは、 れは前に、その正邪に拘らず、かかわ ながら、 われわれの今迄の文学に現れた歴史の認め方は、 資本主義を認め、 われ わ れが 歴史を認めたと云うことに他なら 社会主義を認めた。 唯心論的な見方で この )相対立

あったにすぎなかった。

新し れば も なら し い事実として勢力付けた唯物論をも、 しわれわ れが、 もし わ れわれがそうして社会主義を認めたならば、 歴史を認めたならば、 資本主義を認めた如く、 認めなければならぬであろう。 社会主義をかくも 社会主義をも認めなけ 歴 定の

れわ ばねばならぬ運命を持っている。 文学を論じているのではなくして、 を認め、 'n か は しながら、 個である以上、 唯物論を認めることは出来ないのだ。 われわれは、 此の二つの唯心、 資本主義を認め、 自個の世界の眺め方を論じているのだからである。 唯物のいずれか一つをその認識力に従って、 何故なら、 社会主義を認めたごとく、 われわれは最早やここに至ると、 左様に唯心論

れわれ そこでわれわれは、 の世界の見方も変って来る。 唯心論を撰ぶべきか、 唯物論を撰ぶべきかと云うことによって、わ

われわれの文学的活動に於ける、 も わ れ われが、唯心唯物のいずれかを撰ぶことによって、世界の見方が変るとすれば、 此の二つの変った見方のいずれが、 より新しき文学作品

を作るであろうか。

それは少くとも唯物論もしくは唯物論的立場である。 最早や完全に現れて了ったからである。 何ぜなら、 唯心論及び唯心論的文

学は、

此の唯物論を基礎とした文学であるからだ。 われわれは当然、 もしわれわれが、 コンミニズム文学をも認めねばならぬ。 此の新しき唯物論的文学を、より新しき文学として認めるとすれば、 何故なら、コンミニズム文学は、

ら、 他に かしながら、 いかなる唯物論的文学が存在するか。 コンミニズム文学のみが、ひとり唯物論的文学では決してない。 それは、 新感覚派文学、 これ以外には、 それな

つもなかった。

いずれが、果して文学の圏内に於て、より新しくして 広 闊 なる文学となるべきであろう もし新しき文学が、コンミニズム文学と新感覚派文学の二つであるとするならば、その

か。

想さえ主張出来得れば、曾て犯した唯心論的文学の古き様式をさえも、 義文学と何ら変る所はない。 すならば、 て受け入れているではないか。そこで、彼らは、文学の圏内に於ては、 の上に、位置していると云うことをも認めなければならないであろう。 ニズム文学は、文学としての発展段階を無視したる文学形式であるからだ。彼らはその理 われわれは考えねばならぬ。もしもコンミニズム文学が、曾て用いた弁証法的考察を赦ゅる。 新感覚派文学はコンミニズム文学よりも、より以上に明確な弁証法的発展段階 唯々 諾 々 とし ただ単なる理想主 何故なら、 コンミ

も持ち得ないと云わなければならぬ。 のがあるならば、コンミニズム文学は、文学の圏内に於ては、最早やいかなる発展能力を それで果して文学的活動は正当さを主張し得るのであろうか。もしそれで正当となすも

われわれの文学は、文学形式として、発展能力を持たない限り、一大文学とはなり得な

7

, ,

われわれは今は文学を問題としているのだ。 社会を問題としているのでは な \ <u>`</u>

統な 文学を問題とした社会主義文学でなければならぬ。 コンミニズム文学は、 わ 弁証 れ わ れが社会を問題とせずして、文学を問題としているとき、 法的発展段階のもとに成長して来た、 われわれの文学の新しき問題たるべきことこそは、 問題から 抛 擲 されるべき問題たる素質を持って来 新感覚派文学の中から起るべき運命を持っ かかる社会主義的な文学は、 彼らに代って起るべき充分に 最早やわ たの れ で わ 当然、 あ れ には、 正 そ

此の資本主義 からだ。 みではな しき資本主義文学の発生するのも、 しかし、 か しながら、 **,** , \ \ \ \ もしそうして資本主義文学が新しく発生したとしても、 か にわ の存 何故なら、 在 れわれが、 次に起るべき新しき文学は、 してい われわれの社会機構は、 る限 拒否しようとも、 i) また当然でなければならぬ それは仮令、 新感覚派の中から発生した社会主義文学の 資本主義の存在していることは事実である。 排撃せらるべき文学であるとしても、 いまだ資本主義の一 彼らは唯物論的な観察 大勢力のもとにあ 新

ている限り、共通の問題とせらるべき、一つの確乎とした正統文学形式であるということのいる。 精神をもった新感覚派文学でなくしては、無力である。 かくのごとく新感覚派文学は、いかなる文学の圏内からも、もし彼らが文学を問題とし

の時代であろうとも、 共産主義の時代であろうとも、衰滅するべき必要は文学それ自身の

衰弱を外にして、どこにあろうか。

## 青空文庫情報

底本:「昭和文学全集 第5巻」小学館

1986(昭和61)年12月1日初版第1刷発行

底本の親本:「定本横光利一全集」河出書房新社

初出:「新潮」

1981(昭和56)年~

1928(昭和3)年2月号

入力:早津順子

校正:松永正敏

2004年1月30日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、 青空文庫(http://www.aozora.gr.jp/)で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、 ボランティアの皆さんです。

## 新感覚派とコンミニズム文学 横光利一

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL http://www.aozora.gr.jp/

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL http://aozora.xisang.top/

BiliBili https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks 青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/ ※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。 http://tokimi.sylphid.jp/